

女性同窓生エッセイ一期一会
第15回 服部みどりさん(81期)

1. 関東同窓会との出会いやきっかけ

私が東京でフリーランスのデザイナーとして活動を始めた頃、右も左も分からない状態で、何か故郷の先輩方からお話を伺えたらと思い、同期の友人を誘って総会に参加したのが最初のきっかけです。その後、56期の成田邦夫さんや58期の寺島知恵子さんが、上田で開催した私の個展に足を運んでくださいました。そこからご縁が深まり、毎年夏の総会に参加するようになりました。特に寺島知恵子さんとの出会いは感動的でした。「こんな素敵な方がいらっしゃるのか」と驚き、ぜひ一緒したいと思い、寺島さんが立ち上げられた『女性の会』に参加しました。この会がまた、大変楽しく素晴らしいもので、感銘を受けたことを覚えています。

2. 関東同窓会に想うこと、期待すること

以前は「同郷」という言葉に特別な意識を持っていませんでしたが、関東同窓会に参加する中で、同じ故郷を持つということがこんなにも心を通わせるものなのだと気づかされました。もちろん、参加には時間や費用といったハードルがありますが、それでも、この同窓会が皆様にとって、かけがえのない場として続けていける方法を、共に探っていけたらと思います。時代は急速に変化し、年齢や性別、職業といった枠組みでは語り尽くせないことが増えています。その中で同窓会の在り方を考えることは難しい課題かもしれません。しかし、だからこそ、この貴重な出会いの場が、素晴らしい意味を持つのだと思います。これからも新しい時代に合った形で、つながりを深めていけたらと願っています。

3. 高校時代、一番の思い出

私はあまり目立つ生徒ではなく、文化部に所属する地味な存在でしたので、語れる思い出は少ないのですが、特に心に残っているのは吹奏楽部での経験です。美術の道を目指していた私は、吹奏楽部を辞めることを顧問の飯島一夫先生に相談しました。すると先生は私をお蕎麦屋さんに連れて行ってくださり(!)、こうおっしゃいました。「このまま音楽を辞めたら、心残りになるんじゃないかな?」と。その言葉に心を動かされ、美術の勉強をしながら、最後まで吹奏楽部に在籍することができました。また、担任の高坂先生や美術の石坂先生には、イレギュラーな形の受験にも関わらず応援していただきました。先生方にもリスクがあったと、大人になった今、わかります。支えてくださったことに深く感謝しています。温かい時代の中、先生方のご配慮で自分らしい道を歩むことができました。

4. 近況

現在、羊毛フェルトやアートを通じて、幅広い世代にクリエイティブな体験を提供する活動をしています。特に、子どもから大人まで楽しめるクラフトキットの企画・制作や、ワークショップの開催に力を入れています。また、バリアフリーなアートをテーマに、障害の有無を問わず、多様な人々が共に作品を作り上げる場作りを続けています。「アートで人と人をつなぐ」ことを目指し、日々の活動に励んでおります。